

# 舞踊表現における身体運動の 分析・分類方法に関する一考察

その1. 体育学研究及び  
日本体育学会大会号を中心に

渡辺 本江  
加藤 朋子

## <研究の目的>

舞踊は他の芸術と異なり、表現の媒材が、最も身近な素材といえる身体動きである。従って、表現に必要な多様な動きに対応できる身体が望まれる。ただし、個々の身体運動の技術面だけでは舞踊運動が成立しないことは言うまでもない。

そこで、本研究では、舞踊における運動の客観化の一手法として、身体運動の分析の観点、分類の方法について、その現状を報告し、検討することを目的とした。

## <研究の方法>

調査対象は、1950年～1980年までの日本体育学会大会号、及び体育学研究より収集した舞踊に関する研究561編である。その内、「舞踊作品の動き」「表現を目的とした動き」について取り上げている研究32編を抽出した。そして、それらの研究を、1.舞踊の動きについての分析の観点、2.舞踊の動きについての分類方法の二面から整理し、検討した。

## <結果と考察>

研究対象とした32編に関して、作品分析を行っ

ている研究は、どのような視点により分析を試みているかについて調査した。さらに、表現を目的とした一連の動き（課題を与えて一定の長さの運動を作らせている）について、その分析の観点を抽出した。（表は省略）

上記の結果から、運動の現象を視覚的な面から分析しようとした領域のみを取り上げ、表1に示した。ここで示されるように、動きの分析を試みながらも表現内容を問題としている場合がみられる。また、研究の目的によって分析の基準が異なるため、種々な分析の方法が用いられ、動きを明解に分析し表現することの困難さを示している。

次に、表1で示された観点に基づき、研究者が、動きをどのように捉え、分類しているかを表2に示した。表2より、舞踊の動きの分類にあたって、①身体の個々の部位で動きを捉える分類、②基礎的な身体運動で捉える分類、③動きを一連のまとまりで捉えている分類（多様な動き、くり返しの動きなど）がみられた。ここで、③の捉え方は、舞踊の動きの分類としてみられる特徴的なことと考えられる。この「一連のまとまり」としての分類では、構成を内包、表現内容を捉える、空間形式から捉える分類などがみられる。

以上のことから、一連の動きで舞踊の動きを捉え分類することは、舞踊の特徴と考えられる。そして、この動きのまとまりを作る最少の単位を構成する要因を明確にすることが、舞踊の運動の分析を考えていく上で重要なことであると思われる。この点について、今後、さらに研究を進めていきたいと思う。

表1. 舞踊の動きについての分析の観点

動きを構成する諸要因 { Design Tempo Dynamics 運動の構成要因 運動要因の印象度 緊張の度合い 感情価 動きの要因 適した動き 動きの熟練度 動きの構成 動きの分析 単一動作 動きのつながり 動きと要因 全体性 動きの種類 動きの身体部位による分類 何種類の運動を使用したか	身体部位による動きの分類 { 動きの単一 動きの複合 動きの方向 動きの種類 運動について リズム 一次の運動 二次の運動 動きの変動と構造的性 { 同パターンへの反復 動きのフレーズ 動きの変化度数 動きの性質 運動因子 動きの具体的内容 動きのかんじ 運動の水準 { 動きの水準 Level of movement 動きの高低
---	---

表2. 舞踊の動きについての分類

身体部位	分	類
(目、顔、口、首、肩、腕、手、上肢、上腕、上腕、腰、下肢)	屈伸 振り 回旋 開閉 歩走 跳引倒 止転 握ス横後自	多種な動きの反復 同じ動きの動き 異なる似た動き 平復しな動いている 凡合して激しい 複合が激しい 起伏が激しい つき足しな動き 感性的な動き 感性的な動き 感じのこもった動き 大きい動き 小さい動き 求ダイナミクス 直線的な動き 曲線的な動き 水平面下の動き 固定の動き 速い動き 急激な動き